
ジャンヌダルクのグダグダ正月三箇日

由一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャンヌダルクのグダグダ正月三箇日

【Zコード】

N1546BA

【作者名】

由一

【あらすじ】

転生したジャンヌ＝ダルクの残念な(?)お正月の様子三日分。

1月1日の朝（前書き）

今年もやつてきた1月1日。

私は、ジャンヌ＝ダルク。

今は転生して、十字 まもりとして日々を生きている。

皆は、正月は好きだらうか？ 私は、好きではない。嫌いな行事の一つだ。

面倒でけだるい事ばかりで口クな事が無い。そもそも、私はキリスト教に身を委ねてる聖女ラ・ビュサルなので仏教及びそれにまつわるにあまり興味は無いし参加する必要が無い。しかし家族が仏教徒である以上なかなかそれに逆らうわけにもいくまい。隠れキリストンと云つのはいつの時代も肩身の狭いものである。

1月1日朝。

食卓に着くと、四角形の連なつた黒い箱が置かれていた。

お馴染みのおせち料理と言うものである。現世の父がそれを丁寧に一段ずつ分けて行くと、結果四つに分かれて。賑やかな海鮮類や野菜、肉等が姿を現した。実に豪華だ。日本の料理と言う物は実際に出来が良いと思う。オルレアンの飯もまずまずだったが、このようないいしさが伴うのものはなかなかお目にかかりなかつた。しかし、これだけ煌びやかであつても、毎年全部食べる事は出来なくて、結局少し残つてしまふのは切ない。ウチは皆少食だし、特に私は昆布とかタコとかイカなど苦手なものが多くて玉子焼とか伊達巻くらいしか食べられない。だから、1月3日には取り残されたお節の残りの寂しげな姿を見る事になつてしまふのだ。元々命あつたもが食べ物として我々の前に現してくれたのにも関わらず、それ無碍にしてしまうというのはまことに申し訳が無く辛いものなのだ。おせち料

理とは、喜びと悲しみが入り混じつた複雑な食べ物だと思つ。まあ、ともかく、今日である1月1日の時点ではおせちは、まだ喜びのイメージを放つている。

私が、お節をつまむつと言つ所で、現世の母はお雑煮を持つてきました。

ふんわりとかつおの出汁の香りが私の鼻に入つてくる。いい匂いだ。私は正直、冷たいお節よりも、この暖かい餅の方が好きだ。不覚にも喉に詰まりそうな時もあったが、汁に使つたこの粘着質な白い塊に鰯節をかけて頂くは、正月全体を通して、最も幸せな部類のイベントだろう。餅をたいらげた後に残つた少し粘りのある汁も実に美味しい。

食べている私の耳には、TVに移つてゐる「実業団駅伝」のアナウンスが聞こえてきた。

やれやれ今年もまた面倒な正月が始まつたかと、私は心の中でため息をついた。

1月1日の暦（前書き）

ジャンヌは、お節料理をつまんで餅を食べた。
面倒な正月行事が始まる。

10時頃に、家を出た私達が向かつた先は、十字架先祖が眠る墓地だ。

家から1時間程かかる場所にある。実に遠い。その上着いた後も、お墓まではとても長い坂を歩いて登らなければならない。面倒な行事の一つだ。

墓に辿り着いたら、皆掃除や準備を始める。

私は蠅燭に火を付ける役目を担つた。前世は、火刑に処された身である私にとって火と言つものはあまり好きになれないものなのだが止むおえまい。マッチを20本消費して何とか火を付け終えると、他の仕事は両親や弟に任せて、私は墓にやってきた猫と暫し戯れた。

すべての準備が整うと、家族は皆、墓に手を合わせ念仏を唱える。私も表向きは同じようにしたが、心の中で十字架を手に持つて「大いなる神よ死者に安息を！　アーメン！」と囁いた。しかし、よく考えると、ここに眠る「先祖様達よりも以前に私は生きていたかと思うと複雑な思いだ。きっと、このジャンヌ・ダルクも今は英雄扱いだからどこかに墓或いは供養碑でも建てられて、今頃祈りを捧げられているのだろう。もつとも、肝心の魂はそこにはなく、今はこの日本にあるわけだが。

墓参りが終わり、昼食を済ませたあとは神社に行つた。

導曹寺と言う名前で、交通安全、厄除けで有名らしい。我が十字家は祖父の代から、正月にこの神社に行く事を欠かさぬらしい。感心な話だが、私にとってはこれも面倒なものである。なにせ、この

神社は有名故に人が多すぎて参拝するまでに30分近く、立つたま
ま待たされるのだ。そこまでして、あてになるのかわからない御利
益を祈るよりも、私は静かな教会で祈りたいと思う。こんな大変な
思いをして鈴をがらんがらんと鳴らしても、災いはやってくる時は
やってきてしまうのだ。

何とか参拝を終えると、恒例のおみくじを引いた。
我が家の一年の運はここで占うのだ。

みな、一枚ずつおみくじを買つと、一斉に開ける。
私も、恐る恐るおみくじの紙を開いた。

両親は、共に大吉だった。

弟は、これまた大吉だった。

私は、末吉だった。

皆、去年と同じだ。

かつては、神の御加護にあつた身でこの私だが、いまやおみくじ
でこんな微妙なものしか出ない身の上であるあたり、少し悲しくな
る。とりあえず文面を見てみると、待ち人は「来る」、失せ物は「
いつか見つかる」、結婚は「控えよ」だった。正直どうでもいい。
本当の神の言葉を知っている以上、こう言う類のものは所詮遊びに
すぎない。神は本当に隠されてしまったのだろうか？

こうして1日の用事が終わつた。

家に帰ると年賀状が届いていたが、私の分は一枚も無かつた。

翌日は、親せきの一家との食事会だ。

これが、一番面倒な正月行事である。ずっとひきこもっていた私にとっては、親戚と会うのは本当に気まずいし、話題も無い。インターネット、ブログ上の人間ならばアニメやちょっと風変わりな事、神から賜りし言葉等を話す事も出来るが、親戚連中は皆、普通且つ常識的な真人間ばかりだ。いつもの様な話題を出しても失笑を買うのがオチだろう。

食事する場所はいつも違うのだが、今回は大須にある「玉野屋」と言う店だった。

これに、私は驚いた。この店は以前、ジル＝ド＝レイラと私のブログのオフ会を行った場所だからだ。偶然と言つるのは恐ろしい。私は、この店に深い何らかの縁でもあるのだろうかと思つた。

店に入ると、あの時も絶妙なもてなしとビンゴの賞品運びを見せた女将さんが現れた。そして、私に気付いたが、特に何も言わずに部屋に案内してくれた。ここで、あのオフ会の事を持ち出されたらどうしようかと思っていたから、ホッとした。実に良く気のきく女将である。やはり、この気配りは尊敬に値するだろう。

前回は、「十五夜」という大きな部屋だったが、今日は「曲がり菊」という少人数向けの部屋に案内された。人数が少ないので当然といえば当然だ。私は、いそいそと隅の席に座つたが、現世の父が変な気を聞かせて非常に目立つ真ん中あたりの人に挟まれた席に座られた。現世の父も悪い人間ではないが空気が読めないのが問題

だ。女将を見習つてほしい。

オフ会の、あの賑やかな光景とは違い、今日の玉野屋は閑々とした雰囲気に包まれていた。親戚と両親がなにやらダラダラと世間話をしているのだが、全く付いていけない。FX証券とか年金とか海外旅行の自慢話とか弟や親戚の子供さんの進路のこととか、実に普通すぎて興味がわからない。世の中を遮断していた私には入る余地がない。親戚家族の末っ子、太郎君がおもちゃで遊んでいるのを見ている方がまだマジだが、マジなだけだ。かのFOX老人の話が本当に面白かった事を実感する。ああ、こんな風にただ座っているだけなんて、なんと有意義で無い時間なのだろう?

私は、ただ黙々と運ばれてきた食事をいただき、じつと考えた。考える時間は十分にあった。色々な事を考えた。

私は何故転生したのだろう?

何故、神はお言葉をくださらなくなつたのか?

ジルの言つていた事は本当なのだろうか?

神が隠されたと言うのは、信用に足る事なのだろうか?

ふと、部屋に入ってきた女将を見る。

女将はこちらを向いて、優しく微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1546ba/>

ジャンヌダルクのグダグダ正月三箇日

2012年1月5日20時52分発行